

『就実論叢』 第四七号 抜刷  
就実大学・就実短期大学 二〇一八年二月二十八日 発行

〈資料紹介〉

倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」

与謝野晶子自筆原稿（補遺）「鬱金の公孫樹」「初雪」「顔」  
「歌」（「黄なる花」）（一） 解題・図版・翻刻

加藤美奈子

〈資料紹介〉 倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」

与謝野晶子自筆原稿（補遺）「鬱金の公孫樹」「初雪」「顔」  
「歌」「黄なる花」（一） 解題・凶版・翻刻

加 藤 美 奈 子（生活実践科学科）

はじめに——倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」所収  
与謝野晶子自筆歌稿（補遺）について

倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」（以下、「泣菫文庫」）所蔵の与謝野晶子自筆歌稿一二枚を、本論叢第四〇〜四三号掲載の拙稿において紹介した（『就実論叢』二〇一一〜二〇一四年）。「泣菫文庫」所蔵の泣菫宛晶子書簡一五通については、倉敷市編著『倉敷市蔵 薄田泣菫書簡集 詩歌人篇』（八木書店、二〇一五年三月）に、翻刻・注・解説を載せた。同書掲載の大正五年七月一七日付泣菫宛晶子書簡（書簡番号5）に同封されていたと推測される自筆歌原稿一枚（「輓歌 上田先生のために」）については、本論叢第四四号（二〇一五年）

に掲載した。加えて、先の一二枚の歌稿とは別に、封筒に収められ、書簡の添えられていない歌稿三枚については、本論叢第四五号（二〇一六年）に掲載した。

「泣菫文庫」所収の晶子の自筆歌稿は、総計で一六枚、これらの多くは、大正二〜一〇年にかけて「大阪毎日新聞」（以下、「大阪毎日」）に掲載され、初出不明、『定本 与謝野晶子全集』第一巻―第二〇巻（講談社、昭和五四―五六年、以下『全集』）未掲載となっている詠草も含まれていることを指摘した。

「泣菫文庫」には、泣菫自身の原稿・著書・写真等とともに、晶子自筆歌稿が別途保存されていることが、倉敷市文化振興課の調査により新たに伝えられた。本稿では、現在確認出来る自筆歌稿四枚

を「補遺」として、図版・翻刻を掲載し、解題を付した。

なお、後掲【図版1】～【図版4】は、「泣菫文庫」を保存・管理する倉敷市文化振興課による撮影で、許諾を得て、概ね年代順になるよう掲載した。関係各位に御礼申し上げる。

一 与謝野晶子自筆原稿「薔金の公孫樹」「初雪」「顔」「歌」

（「黄なる花」） 解題

後掲の【図版2】は、一〇首に「初雪」の総題・「与謝野晶子」の署名が右欄外に付されているが、【図版1】は、欄外に題・署名が示されていない。そのため、「大阪毎日」（大正二年一月一六日付）掲載時の題「薔金の公孫樹」を本稿での呼称とする。同様に、【図版3】は、右欄外に「与謝野晶子」の署名はあるが、その上方に「○」と書きされているのみで総題はない。この歌稿の一部の、雑誌「我等」（大正三年三月）掲載時の題「顔」を呼称とする。【図版4】は、右欄外に、「歌」とあり、「与謝野晶子」の署名がある。また、「大阪毎日」（大正三年一月二二日付）掲載時の題が「黄なる花」であるため、「歌」（「黄なる花」）とした。

四枚の原稿用紙にはいずれも、一マスに一文字ずつペン書きで短歌が記入され、一首を二行に収め、新聞掲載を意図したと思われる総ルビが付されている（【図版3】「顔」一〇首目の一行目のみルビが付されていない）。

用紙は、概ね縦約二六cm×横約三六cmの洋紙、「B4」サイズに相当し、青野の四〇〇字詰原稿用紙である。いずれも、「十ノ廿松屋製」と左下欄外に青で印刷されている。【図版1】【図版2】【図版3】には、中央青野印刷で魚尾の下方に「○」印があり、【図版4】のみ「○」印がない。

大正二年七月二〇日付「大阪毎日」に掲載された「湯あかりの後」及び、歌集への所収状況より大正二年六月～八月頃と推定される「土ふみて」（無題のため拙稿において第一首目初句により仮称）の原稿には、この「○」印がある（本論叢第四一号掲載、二〇一二年）。それより後の、大正四年九月二九日付「大阪毎日」に掲載された「秋の薔薇」には「○」印がない（本論叢四三号掲載、二〇一四年）。今回の原稿は、後述のように、大正二年一月～大正三年一月に掲載された作品の原稿であり、「土ふみて」と「秋の薔薇」の間の時期の自筆歌稿であることから、使用された原稿用紙の形態も矛盾しない。すなわち、右の歌稿を年代順に並べると以下ようになる。

大正二年七月二〇日付「大阪毎日」掲載「湯あかりの後」  
大正二年六～八月（所収歌集より推定）（「土ふみて」）  
原稿用紙―「十ノ廿 松屋製」（○印あり）

【図版1】 大正二年一月六日付「大阪毎日」掲載「薔金の公孫樹」  
【図版2】 大正二年二月二日付「大阪毎日」掲載「初雪」

【図版3】大正三年三月『我等』掲載「顔」

原稿用紙―「十ノ廿 松屋製」(○印あり)

【図版4】大正三年一月二二日付「大阪毎日」掲載「黄なる花」

原稿用紙―「十ノ廿 松屋製」(○印なし)

大正四年九月二六日付「大阪毎日」掲載「秋の薔薇」

原稿用紙―「十ノ廿 松屋製」(○印なし)

【図版1】「薔金の公孫樹」は、前述のように、大正二年一月六日付「大阪毎日」に九首が掲載、内七首が、晶子の第二二番目の歌集『さくら草』(東雲堂書店、大正四年三月)に所収され、二首が『全集』の「拾遺 大正二年」に確認出来るが、一首の初出が不明で、『全集』未収録である。

【図版2】「初雪」は、大正二年二月二日付「大阪毎日」に、「初雪」と題して一〇首全てが掲載されている。歌集への採録はなく、『全集』の「拾遺 大正二年」に収められている。

【図版3】「顔」は、「大阪毎日」には掲載されず、雑誌「我等」(大正三年三月)掲載の「顔」に、五首が含まれ、『さくら草』(前掲)に所収されている。加えて、『さくら草』には、『全集』で初出が示されていない、自筆原稿の一首が収められている。自筆原稿の残り四首の内、一首は、「我等」(前掲)に類歌が認められるが、三首は、

初出が不明で、『全集』未収録である。

【図版4】「歌」(「黄なる花」)は、大正三年一月二二日付「大阪毎日」に、「黄なる花」と題して一〇首全てが掲載されている。内四首が『さくら草』に所収され、六首が『全集』の「拾遺 大正二年」に確認出来る。

前述の拙稿においても、「泣菫文庫」所収の晶子自筆歌稿は、未公表短歌を含む可能性のあることを紹介してきたが、今回の四枚の自筆歌稿についても、以上計四首(類歌がある一首も含めるならば五首)の初出が不明で、『全集』未収録であり、未公表短歌である可能性が指摘出来る。また、初出・所収歌集の確認出来る作品についても、新聞・雑誌掲載歌、歌集所収歌との間にそれぞれ表現の異同が見られる。

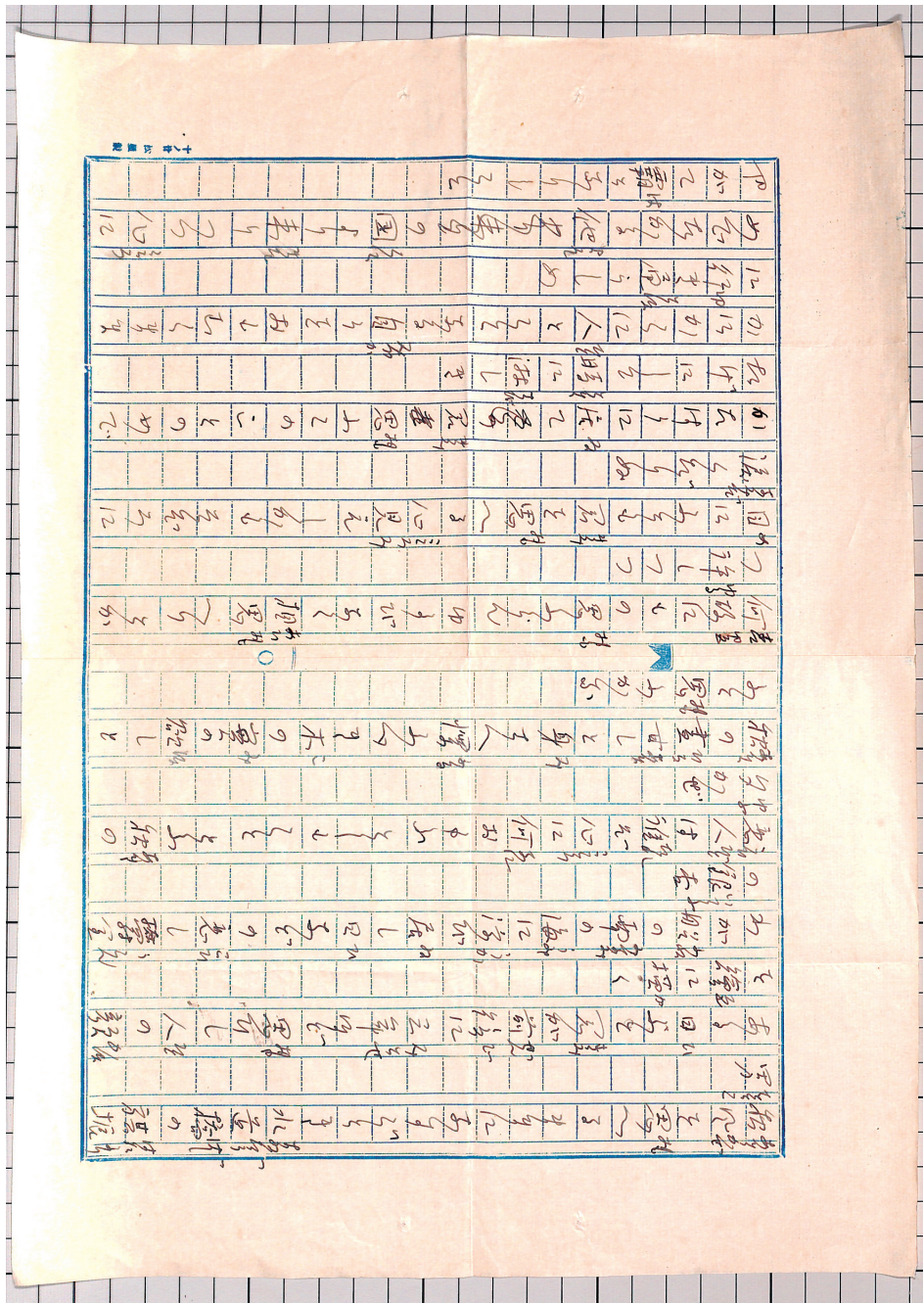
本論叢次号掲載予定の「与謝野晶子自筆歌稿(補遺)「薔金の公孫樹」「初雪」「顔」「歌」(「黄なる花」)(二) 解説」において、初出紙・誌と比較し異同の詳細を示し、解説を加えることを予定している。

二 与謝野晶子自筆歌稿「薔金の公孫樹」「初雪」「顔」「歌」(「黄なる花」) 図版・翻刻

以下、与謝野晶子自筆歌稿四枚の図版(【図版1】～【図版4】)を掲げ、翻刻を後に示した。翻刻における改行等は図版に準じてい

る。字体は新旧ともに自筆に準じた。■は判読不能の箇所及び、文字の修正箇所、修正前の文字が不明であることを示し、修正後の文字の前に示した。また、修正前の文字が判読出来る場合、□で示し、元の文字を〔〕で修正後の文字の前に示した。その他の注記も〔〕で示した。

【図版1】与謝野晶子自筆原稿「鬱金の公孫樹」

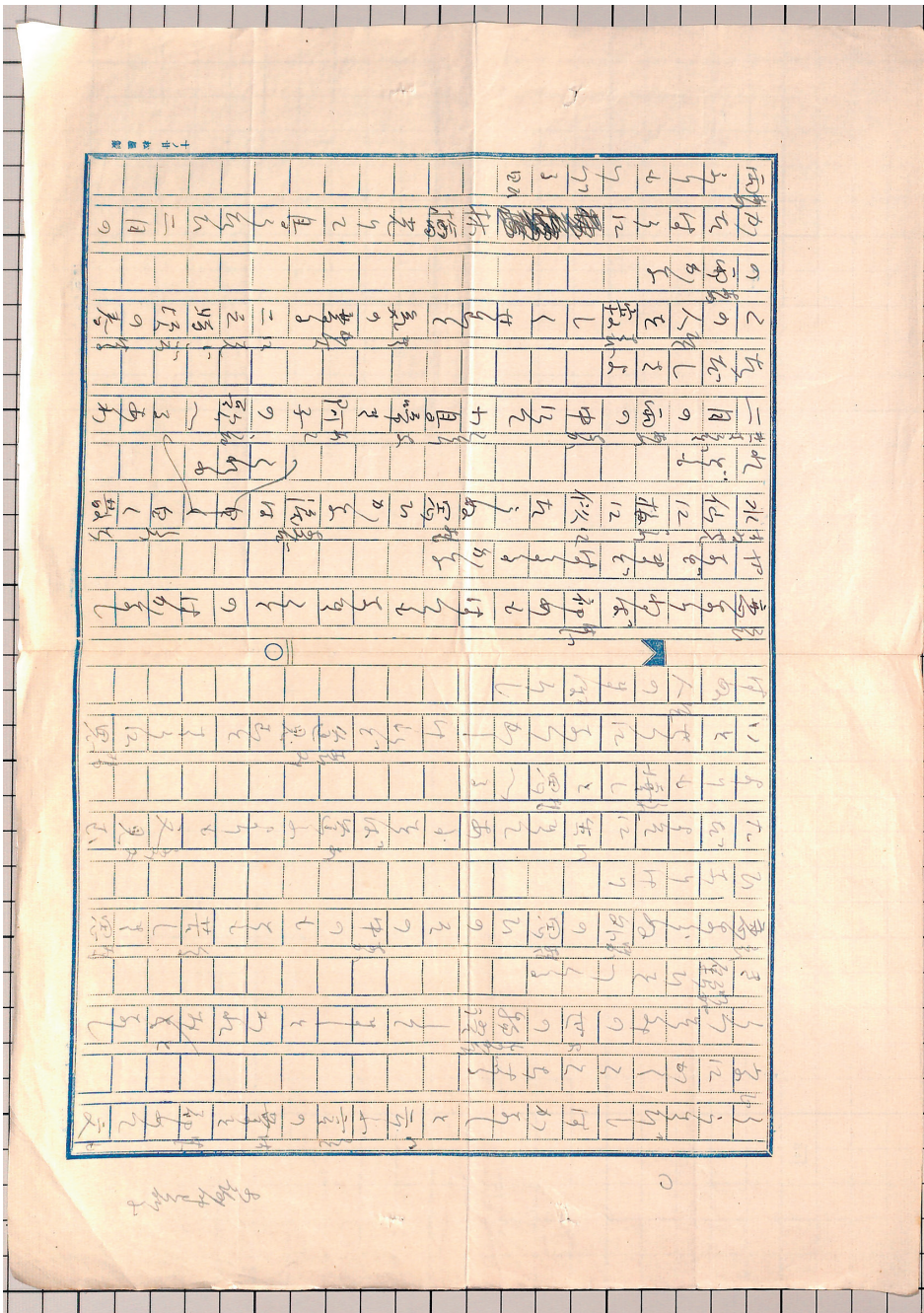


【図版2】 与謝野晶子自筆歌稿「初雪」

Handwritten Japanese lyrics for the poem 'Furusu' by Yonekura Aiko, written on grid paper. The text is written in kuzushiji style and includes hiragana, katakana, and kanji characters. The lyrics are arranged in vertical columns, reading from right to left. A small blue arrow points to the right in the middle of the page. At the bottom left, there is a signature and the name '与謝野晶子' (Yonekura Aiko).

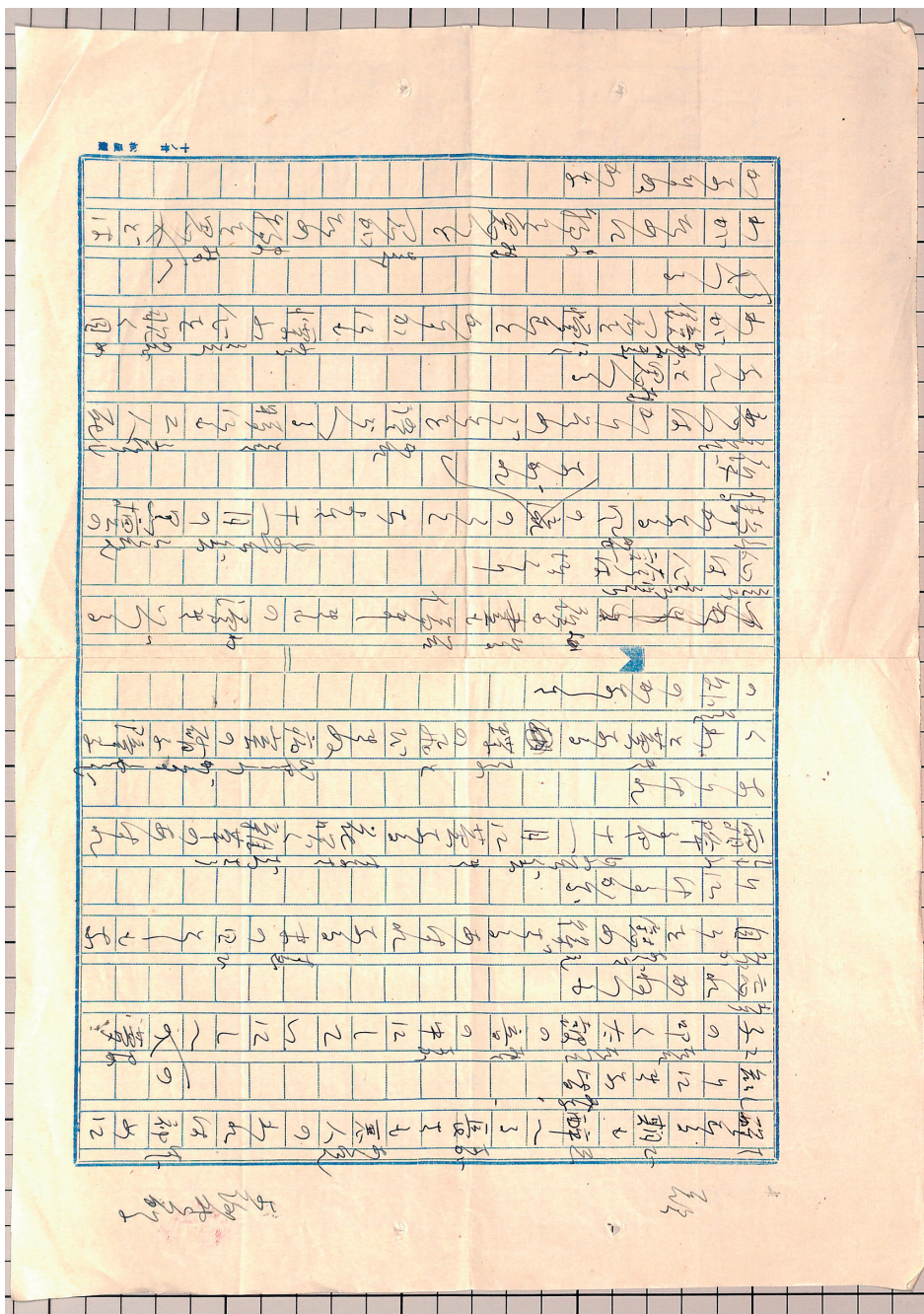
初雪の如き  
心さへも  
雪の如き  
心さへも  
雪の如き  
心さへも  
雪の如き  
心さへも  
雪の如き  
心さへも  
雪の如き  
心さへも  
雪の如き  
心さへも  
雪の如き  
心さへも  
雪の如き  
心さへも

【図版3】与謝野晶子自筆歌稿「顔」





【図版4】与謝野晶子自筆歌稿「歌」（「黄なる花」）



【図版1】与謝野晶子自筆歌稿「鬱金の公孫樹」―翻刻

秋風を思へるままになすごとき水道橋の旗振  
男

ある日ふと君が前後に三年ほど思ひし人の顔  
を繪に描く

わが船の南の海に浮び居し日などの恋し鬱金  
の銀杏

恋人は誰ぞ心に何おもふとしもこととふ秋の  
夕かぜ

秋の晝甘しと身さへ慄ふべき木の實の欲しと  
ふと思ふかな

何故にももの思ふらんゆるびなく相思へりとか  
つ許しつ

目にふとも君を思へる心見えしかもそぞろに  
涙くだりぬ

かたはらに居て君思ふこのことのため  
たげにして時に淋しき

かにかくに人とことなる自らをおもむくまま  
に行き通らしめ

めでたかる他「(より來り)」の國より來りつつ心に  
やがて覇となりしこと

【図版2】与謝野晶子自筆歌稿「初雪」―翻刻

〔欄外〕初雪 与謝野晶子

赤い實が南洋のよなこちするその青の木の  
上の雪かな

末の子の病むかたはらを脱けいでし夜明に降  
れる師走の小雪

さがみのや城が嶋なる人來ると待つ日の朝の  
たわわなる雪

雪ふれば古錦繪の思はれぬ江戸の男女のはた  
おもはれぬ

東京へ赤きひとでの貝などを友の持てこし師  
走雪の日

雪の日や鼓を打てる家ありて番町かなし二階  
のかなし

雪の日は雨にまさらず青桐の幹むくつけくな  
りにけるかな

「さがみのや」椿の木おはぐる色をするゆゑに見  
じと思へるわが庭の雪

雪ふれば子等のつくりし小だらひの池も初  
めて池ごちする

菜の畑に降れる雪見て冬の日もいとなつか  
しきものと思ひぬ

【図版3】与謝野晶子自筆歌稿「顔」―翻刻

〔欄外〕○ 与謝野晶子

うらさびしはかなしと云ふ言の葉を初めて文字にかくこちする

うつそみの世の物語してましとわれお□〔と〕となし

き願ひをつくる

恋ならぬ外の思ひのその中のもとも苦しき思

ひなりけり

ただよそに生きてあるをば逢ふよりも文見む

よりも嬉しと思へる

いとせつになつかしけれど逢見むとさらに思

はぬ人のまぼろし

恋ならねば初めもはてもなきことのはかなし

やなどまどはるるかな

水仙に梅に似たらぬ思ひかな涙は□□〔白く〕これも白く散

れども

二月の雨の中にて小鳥啼き阿子の歌へるあわ

ただしさよ

この人を救しくせむと気の変る二三時頃の春

の雨かな

かたはらに■■■■林檎光りて鳥うたひ二月の

雨ふりもいづる日

【図版4】与謝野晶子自筆歌稿「歌」〔黄なる花〕―翻刻

〔欄外〕歌 与謝野晶子

醒むる期も酔へる長さも悪人のわれは初めに知りにきな皆

子の叩く太鼓の音の中にしていにしへ□〔の〕の夢

忘れかねつも

自らを慰め得ざるあはれなる末の日としもな

りにけるかな

霜降るや十一月に黄なる花咲く雑草のあはれ

なりけれ

くわと黄なる□〔胡〕蝶の飛びきぬ病室の硝子障子

の外のかなしさ

□□□□□〔いたましき〕夜も晝も傷ましきもの湧きいづる

心は心誇はほこり

静かなる風の□〔流〕ながれのこちよさ十一月の黒檀の

夜

恋人はかりそめごとを語らへる時にも二人死

なと思へる

わが鏡君を憎むとかすかにも慄ふ心を覗く目

■■うつつ

わがために物を思へと君がため物を思□〔へ〕へどは

かなまぬかな